

李登輝氏が日本に訴えた中華秩序との対決

今、国家のアイデンティティが問われる時

首都大学東京 3年 和田 浩幸

李登輝前総統の訪日を歓迎

台湾の李登輝前総統が去る5月30日に訪日された。今回は、奥の細道をはじめとした文化交流を目的とした訪日であった。訪日後、東京都江東区にある芭蕉記念館を訪ねられた際、多くの日本人や台湾人が詰め掛け、李登輝ご夫妻の到着を歓迎した。

私もその場に参加することができ、多くの方々と共に日の丸と台湾独立旗を掲げて、李登輝ご夫妻を歓迎させていただいた。李登輝氏を真直に見ることができ感動すると共に、今回の訪問が大きな妨害を受けることもなく、無事、果たされたことを心から喜ばしく感じた。

この日、最も驚いたのは町の方々が大変温かく歓迎されていることだった。こうした町のごく普通の人々との交流が為されたことは、入国すら拒否された以前と比べれば、非常に画期的なことであると感じた。

この芭蕉記念館は、松尾芭蕉の奥の細道出発の地らしく、最後に歓迎団の方から金の杖が授与され、皆でこれから奥の細道へと旅立たれる李登輝ご夫妻の前途を祈って、「行ってらっしゃいませ」の掛け声で終了した。

その後も、李登輝ご夫妻は国際教養大学学長の中嶋嶺雄氏の先導のもと、かねてから切望されていた奥の細道の旅を堪能された。

そして、再び東京に戻って来られ、6月7日の午前10時に靖国神社への参拝を果たされた。

李氏が我々に投げかけたこと

李登輝ご夫妻が無事、靖国神社への歴史的参拝を遂げられたその日の夕刻、東京のホテルオークラ東京にて、講演会が催された。九州や近畿の学生と共に私は首都圏の代表としてその場に参加させていただいた。表題は、「2007年とその後の国際情勢」とあり、世界的視野から国際情勢に関する李登輝氏の分析がなされた。

私はこの講演会参加に当たって、一つの目的意識を持って臨んだ。それは、台湾民主化のリーダーである李登輝氏が現在の中国情勢をどのように見ておられるかということであった。中国を知ることによって、今後の日本のあるべき姿が見えてくるのではないかという思いがあったからである。

会場には溢れんばかりの人が詰め掛けており、それだけでも李氏が日本においてどれほどの影響力をお持ちであるのか、その発する言葉に熱い視線が注がれているのかということを感じた。

「李登輝」といえば、云わずと知れた台湾民主化の英雄であり、当然話は中国情勢が中心になると思われた。しかし、まず、イラン、イラク、ロシア、アメリカの情勢について

話を進められ、難解きわまる国際情勢の問題を大変わかりやすくお話しされていると感じた。中国を知るためには、世界第一位のパワーを持つアメリカやアメリカと関係を持つ国々について、正確に理解しなければならないということだと感じた。

この講演で私にとって、とりわけ印象に残ったのは2007年が政治の年であるということだった。日本、台湾、韓国、フィリピン、オーストラリアなどが政治リーダーの選挙を控えており、共産主義各国（北朝鮮、中国、ベトナム）も人事調整の時期であるが故に、各国が外政よりも内政に奔走するため大きな政治の動きは起きず、来るべき2008年に備える年になるだろうという話だった。

また、李氏は中国の経済危機を筆頭とする内政問題を述べた上で、混迷する中国を救うのは台湾の民主化しかないのだと力強く宣言された。「進歩と退歩を繰り返す」中国をはじめ、世界秩序の安定のためには台湾の民主化こそが必要であるというのだった。李氏の台湾民主化への切実かつ緊迫した語り口を通して、この問題を考えることの意味について改めて考えさせられるところがあった。

李氏の台湾民主化に懸けるロマン

多くの日本人が、固唾を呑んで一言一句逃すまいと熱い視線を注ぐ李登輝氏とは如何なる人物なのであろうか。簡単にその歴史を振り返ってみたい。

李氏の先祖は、大陸から渡ってきたいわゆる「客家」であり、李氏はその何代目かの子として1923年台湾に生まれた。そこで受けた教育こそ台湾における日本統治時代の教育であった。李氏は、その正統な学歴を歩み、公学校、旧制中学、高校を卒業し、京都帝国大学に入学した。大学においては、農業経済学を学び、それが後に中国から渡ってきた国民党主席蒋介石の跡を継いだ蔣経国に登用されるきっかけともなった。

大学時代は、万巻の書を紐解き、生とは何か、死とは何かということにつて真剣に考え抜かれた。そのような気質ゆえであろうか、大東亜戦争期の学徒出陣の際には、帝大のエリートでありながら、前線に向かい危険性が極めて高い歩兵に自ら志願されるほどであった。

大東亜戦争を生き残られ、戦後は台北大学、コーネル大学と更なる学問研鑽を積まれた。その後、1971年に国民党に入党、1973年には台北市長になられている。李氏自身は政治の道を歩む気持ちはほとんどなかったが、蒋介石の死後、1984年には蔣経国によって、副総統に抜擢された。そして、「総統職の継承は憲法に従って行なわれるべきものであり、蔣家のものが総統職を継ぐことはない」との蔣経国の意向もあり、彼の死後、1988年7月国民党大会において総統職への就任が決まった。

日本統治時代の教育を受け、戦後は祖国・台湾への憂国の情に燃えた李氏が大陸から渡ってきて外省人と現地の本省人とを厳格に区別し、1947年の二・二八白色テロを実行した国民党に入党したのは、不思議なことのように思われる。このことに関して、『李登輝 - 新台湾人の誕生』の著者である角間隆氏は次のように述べられている。

「要するに、当時の台湾には『国民党』以外の政党が存在せず、李登輝氏が本当に『台湾のために奉仕』しようとするれば、嫌でも国民党に入党せざるを得なかったのである。（中

略)

そして、この瞬間(国民党総統として蒋介石時代の白色テロの全貌を明るみに出し、同時に直接、犠牲者の遺族に陳謝した)から、かつて南京を首都に中国大陸全土に覇を唱えていた『中国国民党』から、台湾の台湾人の台湾人のための『台湾国民党』へと、党の性格そのものを根本から変えてしまったのだ。

だからこそ、2000年3月の総統直接選挙の時に、『国民党』が予想外の敗北を喫して、『民進党』の陳水扁候補が第4代総統(第10期総統)の座に就いて、歴史的な一党独裁時代の幕引きをした際にも、李登輝氏は全く騒がず、

『これが民主主義なのだ』

と呟いて、むしろ微笑みさえ浮かべて、21世紀を背負って立つ若き獅子に、心からなる祝福とともに全ての権力を禅譲したのである。」(角間隆著『李登輝 - 新台湾人の誕生』)

李氏は、総統就任後、長きに渡って敷かれていた戒厳令の解除や「新党の結成」を認める法案作成など矢継ぎ早に民主化への道を突き進んだ。そして、「いつか、かつて我らのものであった中国大陸の覇権を取りもどさなければならない。今は、そのための力を蓄えているに過ぎない」というかつての国民党の方針を一転し、99年の「台湾と中国は特殊な国と国の関係である」という二国論の表明に象徴されるように、新しい台湾のモデル、氏の言うところの「新中原」の確立へと着実に歩んで来られたのである。

しかし、2000年の総統選挙において、出馬すれば再選が確実と思われていた李氏は、政界引退を発表し、次の世代に総統職を譲渡する意向を示した。結果、民進党の陳水扁が勝利し、中華世界において始めて国民による選挙によって、政権交代が果たされるという歴史的快挙が成し遂げられた。これは、李氏が訴え続けた台湾人による台湾のための政治が平和裡に実現された待望の瞬間でもあった。

今こそ確立すべき日本の国家のアイデンティティ

李登輝氏は、講演会において、台湾民主化の意義を我々に訴えかけ、かの共産党一党独裁の中国にまで民主化のうねりを起こそうと言われた。これは、あまりにも果てしなく不可能とも思えるような話であった。しかし、このような李氏の発言は不可能を可能と思わせるようなプラスの力で満ち溢れているように感じられた。それは、李氏が歩んで来た「結果を残す政治家」としての存在感がもたらすものなのであろう。

台湾において、国民による平和的選挙によって民主化が実現された。このことによって、台湾は大陸の中共とは一線を画するようになったのである。中国でも1980年代、民主化運動が盛んに行なわれていたが、1989年の天安門事件を境に、共産党政権への怒りの矛先は反日という形に取って代わられるようになってしまった。

そして、つい最近まで、日本政府は中国の歴史認識を中心とした反日政策に対抗することができず、ただひたすら謝罪を繰り返すばかりだった。しかし、中西輝政京都大学教授が「小泉前首相の靖国参拝を機に、歴史の季節から安保の季節へと変わりつつある」と指摘される通り、いまや日中両国の状況は大きく変貌を遂げている。事実、今回の李登輝氏の訪日に関して、反日勢力が期待した中国からの抗議はほとんどなかった。今後の日中関

係の在り方について、評論家の石平氏は以下のように述べられている。

「日中間の抱えている対立点と問題点のほとんどは、そもそも、完全に解決することが不可能なものである。(中略)靖国問題もそうである。それぞれの民族的アイデンティティ・国家理念・伝統文化の相違から生じてきたこの対立は、最初からいわば『文明の衝突』として、妥協のできないイデオロギー紛争の側面を強く持つものである。

つまり、諸々の解消法のない深刻な対立を抱えながら、それでもできるだけ安定した相互関係を作っていくべきなのは、日中関係の宿命である。日本はこれから、国家の尊厳を懸けて中国という巨大な存在と対峙しながら、この国との全面衝突という『最終局面』だけは避けなければならない。大変な難題ではあるが、中国大陸の近海から引越しすることができない以上、日本という国はこのような宿命を背負っていくしかないのである。」(石平著『日中の宿命』)

国家のアイデンティティの源泉である歴史で二度と負けない、という気概を持つことは勿論、我々自身が中華思想を凌駕するだけの国家理念を国内で打ち出していかなければならないのだと強く思われてくる。

李氏は、ご講演の中で前述の通り、「2007年は政治の年である」と述べられた。このことについて、講演会終了後に参加したメンバーで討論が為された。「この言葉の真意は、それぞれの国家のアイデンティティをこの一年でどれだけ充電できるかということであり、学生集団である我々に言い換えれば、如何にして、日本文明の使命を内に秘めた学生集団を形成できるかということである」という趣旨のことが自分にとっては非常に心に残り、己のあり方を問われるような思いがした。

安易な親中は勿論、外圧への反発だけでも駄目なのである。李氏が私達日本人に残した台湾民主化へのロマンに匹敵するようなものを自ら日本人として育ていけるかどうか、これこそが李氏が私達に問い掛けたものであり、このことをより一層追求する学生集団を作っていかなければならないのだと考えさせられた。

今回の李登輝氏のメッセージを心に刻み、中国と如何に対峙するか、また、中華秩序に打ち勝つべく、日本文明に関する理解を深めていきたいと感じた。そして、それを友らと共有すべく夏季の遊学事業に向けた取り組みに邁進していく決意を改めて強くした。

李登輝前総統の靖国神社参拝の意義

甲南大学 5年 坂 直純

62年ぶりの兄との再会

去る6月7日午前10時、台湾前総統の李登輝氏が靖国神社を参拝された。台湾前総統であられる李氏が靖国神社を参拝されるというその歴史的な瞬間に、私はぜひ立ち会いたいと思い近畿から上京した。

李氏には、大東亜戦争の際にフィリピンのマニラで戦死された兄・李登欽氏(日本名は

岩里武則)がおられ、靖国神社に合祀されている。今回、李氏は靖国神社参拝を、「62年前に別れた兄に頭を下げる個人的行為です」と述べられた。境内では日の丸と台湾独立旗(編集部注:緑の台湾旗で、主に在日台湾同郷会などが使用)で迎える多くの人々の中、靖国神社の社頭で実に62年ぶりの兄との再会を果たされた。

マスコミなどで報道されていないが、その日の夕刻、李登輝氏は国際情勢の講演の質疑応答で靖国神社参拝の話にふれられた。これまで李氏の参拝が実現しなかったのは、98歳まで御存命であられた父親がおり、その父は60年間ずっと兄の戦死を信じず、李氏は父の心情を配慮してずっと家で供養することができなかったからだという。しかし、兄の供養ができなかった60年間も、靖国神社でその兄がずっと祀られ、慰霊され続けてきたことに李氏はとても感謝していると述べられていた。

その話から私は身寄りのない方などを含めた、すべての御霊を国家として祀る靖国神社の使命の大きさを改めて感じた。講演のなかで靖国神社への参拝について「あと短い人生の中でやるべきことをやったと思います」と述べられ、私は李氏がどれほどこの参拝を切望されていたのかを感じた。

李氏の靖国神社参拝にみる歴史的意義

一方で、今回、李氏の靖国神社参拝が達成されたことは、これまでの日中関係が大きく転換しているといえる。

中国政府は台湾を中国の一部であると主張しているが、李登輝氏はそもそも台湾は独立主権国家であると主張してきた。そのため平成13年に李氏が心臓病の手術のため来日したとき、中国政府からビザを発給しないよう日本政府に圧力がかけられた。また平成16年の2度目の来日には、政治的発言はさせず観光旅行に徹するという条件で日本政府がビザを発給し、外務省職員ふたりがスケジュールを掌握して監視するなど、中国政府におもねるような状況にあった。

これほど中国から敵視されてきた李氏が今回靖国神社を参拝し、また講演会まで開催できたことは大きな前進である。

李氏はその靖国神社参拝に先立ち、自分の参拝を政治利用してほしくないという報道関係者に語られていた。靖国神社はいつも中国などから歴史や政治問題にされてきた。そもそも靖国神社をめぐる問題について、李氏は「中国大陸やコリアにおいて、自国内の問題を処理できないがゆえに作り上げられたものと思っている」と述べている。李氏が言われていることは、中国共産党による一党独裁のもとで虐げられている国民の不満が、中国共産党へと向かないように反日を煽って、不満のはけ口としているということである。

今回、中国は李氏の参拝を批判しているものの、これまでのような内政干渉を加えることはなかった。そこには昨年8月15日の小泉首相による靖国神社参拝が大きく影響していると思う。これまで中国は歴史問題を武器として日本を骨抜きにし続けてきたが、小泉首相の参拝は「もう歴史カードは通じない」というメッセージを中国につきつけたのだと思う。

中国の内政干渉に屈しないことが、国家のリーダーとしてあるべき姿だと改めて李登輝氏は示してくださったと感じる。

台湾人の慰霊の心を代表した李氏

李登輝氏は国家のために命を捧げた方々を純粹に慰霊することは当然であり、他国から内政干渉されるようなものではないと身をもって示された。

大東亜戦争において当時日本人として戦い散華された台湾人は約3万3千人といわれる（編集部注：厚生省が昭和48年4月に発表した台湾出身戦歿者数は30,304人）。高砂義勇隊という台湾原住民による部隊などは、戦場の前線などでも日本人以上に勇猛果敢だったため、6千人といわれる内の約半数が亡くなられたという。その御霊も当然靖国神社で祀られているのである。

そのためこれまでも台湾人の方々は、大東亜戦争で亡くなられた英霊を慰霊しようと、ずっと靖国神社での参拝をなされてきた。つまり、李氏が靖国神社を参拝したことは何も特別なことではなく、これまで粛々として行ってきた台湾人の慰霊の思いを代表して伝えるものだったのではないだろうかと思う。

「運命共同体」としての日台関係

中国はいまも台湾領有を主張し続けており、毎年10パーセント以上といわれる軍拡を背景とした武力で台湾を恫喝している。もし中国による台湾侵略が現実となれば、日本は台湾海峡を通過してくるシーレーンを中国によって遮断されてしまい、日本は石油輸入の大部分を依存する中東からの輸入航路を遮断されてしまうことになる。台湾の死とは即刻日本の生存問題にまで発展するものなのだ。つまり、日台は文字通り運命を共にしている「運命共同体」である。

そして、大東亜戦争のときにも日台はまさしく運命共同体として戦い、日台の多くの先人が台湾を守るために命をおとされた。いま戦後60年を経て再び、運命共同体としてのあり方が日本人に問われていると思う。

日本を守ろうと純粋な思いで戦われた台湾人の英霊の方々は、いま台湾の置かれた苦境に私たちが目も向けられないようではどれほど嘆かれるだろうか。今一度私たちは学生として台湾をめぐる問題を真剣に考えていく必要があると思う。